

定住外国人のリテラシーの実態把握と環境改善に関する研究

A Study on the Japanese Literacy of Foreign Residents in Japan and
Their Integration into the Local Society

新矢 麻紀子 (SHIN'YA Makiko)

報告者は、日本に暮らす移住外国人の日本語学習や日本語習得のあり方、そして彼/彼女らへの日本語学習保障に関して研究を続けている。現在の日本では、結婚移住者や移住労働者等の外国人に対して日本語教育が公的に保障されていないため、地域によっては日本語学習を実施する教室等が全く開設されておらず、日本語学習の機会が得られない外国人が少なからず存在する。

報告者は、共同研究者らと共に、2009年から上記のような日本語教室が存在しないX地域において漢字教室を開催し学習支援を行ってきた。外国人にとって日本語の文字の読み書きは困難を極めるが、特に口頭言語に比べ、書字言語は自然習得が不可能に近いことから、学習支援の必要性を認識し、文字習得支援に向けた日本語教室を開催している。また、2013年度からは漢字学習支援に加え、外国人のリテラシーの実態を把握する研究を開始し、継続中である。2013年度は3回、2014年度は4回、2015年度は5回、X地域を訪問し(各回3-4日間)、漢字教室の開催と、その教室に参加する学習者のリテラシーについての調査(読み書き能力測定、読み書きに関する困難と対処ストラテジー、学習の状況、等)を行った。さらに、多文化共生社会の実現には外国人の受け入れ側であるホスト社会の実態把握も必要であると考え、その調査も継続実施している。2015年度には、X地域の役所、教育委員会、社会福祉協議会、市民ボランティアグループに聞き取り調査を行った。さらに、地域住民が共にコミュニティを形成する隣人として外国人を認識できるようになることを目指したアドボカシー活動の一環として、CATVの番組に筆者ら研究グループと外国人が出演した。また、その意図に賛同した大手地方紙が漢字教室の記事を掲載した。

さらに、他地域における定住外国人への言語学習支援とリテラシーの実態を把握するため、京丹後市、沖縄県にて教育実践者、行政職員への聞き取りを行った。近年、都市から離れた町に外国人が増え、ボランティアによる日本語学習支援活動が活発になっていることがわかった。カナダのバンクーバーでは高校教員に聞き取りを行い、移民の生徒への英語支援や学習支援について聞いた。

その他、年間をとおして、第二言語教育、リテラシー、成人基礎教育に関わる学会、研究会、シンポジウム等に参加し、情報収集を行った。

研究成果は、「日本語教室不在地域における国際結婚移住女性のリテラシー補償と社会参加：生活史と学習環境に着目して」(『大阪産業大学論集人文・社会科学編』26、2016-02、共著)、「国際結婚移住女性の書字言語習得支援に関する一考察—ソーシャル・サポートという視点から—」(*Journal CAJLE*、vol.17、2016-08、共著)(以上、査読付き論文)にて報告した。なお、上記2論文の元となる研究発表はそれぞれ、CAJLE2015年次大会(Simon Fraser University、2015-08)、日本社会教育学会第62回研究大会、2015-09)において行った。それらの詳細は、2014年度所報に掲載されている。